

Laplacian

$$\Delta u = \sum_{i=1}^n u_{x_i x_i} \tag{1}$$

Report 1.12

U は連結とする。関数 u は U 上で C^2 -級、 \overline{U} 上で C^1 -級であり、次を満たしているとする。

$$\Delta u = 0 \text{ (in } U), \ u = g \text{ (on } \partial U, \ g \geq 0) \tag{2}$$

g が ∂U 上のどこかで正であるなら u は U 内で常に正であることを示せ。

.....
 \overline{U} 上で C^1 -級であるので、 u は連続である。この為、ある点 $x_0 \in \overline{U}$ が存在し、 $u(x_0)$ は最小となる。つまり、 $u(x_0) \leq u(x)$ ($\forall x \in \overline{U}$) である。

もし、 $x_0 \in \partial U$ であれば、 $u(x_0) = g(x_0) \geq 0$ であり、 $0 \leq u(x_0) \leq u(x)$ となる。

もし、 $x_0 \in U$ であれば、 u は U で定数関数となる。 ∂U にて $g \leq 0$ なる点があるので $u \geq 0$ である。

Report 1.13

$$\tilde{u} = \int_{\mathbb{R}^n} \Phi(x - y) f(y) dy \tag{3}$$

$n = 2$ のとき、 \tilde{u} は有界ではないことを示せ。

.....
調和関数 $\Phi(x)$ は $n = 2$ において $\Phi(x) = -\frac{1}{2\pi} \log |x|$ である。
 $|x|$ がそれぞれ 0 と ∞ に飛ばした場合、 $\Phi(x) \rightarrow \infty$ ($|x| \rightarrow 0$) と $\Phi(x) \rightarrow -\infty$ ($|x| \rightarrow \infty$) であるので、 $|\Phi(x)| \rightarrow \infty$ である。

$$\tilde{u} = \int_{\mathbb{R}^2} \Phi(x - y) f(y) dy = \int_{\mathbb{R}^2} \Phi(y) f(x - y) dy \tag{4}$$

Report 1.14

$n = 2, \ N = 3$ のとき、次の式を示せ。

$$u(x) - \sum_{k=0}^{N-1} \sum_{|\alpha|=k} \frac{D^\alpha u(x_0)(x - x_0)^\alpha}{\alpha!} = \sum_{|\alpha|=N} \frac{D^\alpha u(x_0 + t(x - x_0))(x - x_0)^\alpha}{\alpha!} \tag{5}$$

.....

1. 次の初期値問題の解である関数 u を求めよ。

$$\begin{cases} u_t + b \cdot Du + cu = 0 & \text{in } \mathbb{R}^n \times (0, \infty) \\ u = g & \text{on } \mathbb{R}^n \times \{t = 0\} \end{cases} \quad (6)$$

$c \in \mathbb{R}$ と $b \in \mathbb{R}^n$ は定数とする。

.....
式を次のように変形する。

$$u_t + b \cdot Du + cu = 0 \Rightarrow u_t + b \cdot Du = -cu \quad (7)$$

ここから、左辺は u を微分すると u の定数倍になることが読み取れる。

$$u = \exp\left(\frac{c}{n+1} \left(t + \sum_{i=1}^n \frac{x_i}{b_i}\right)\right) \quad (8)$$

$$u(x, t) = g(x - tb) \quad (x \in \mathbb{R}^n, t \geq 0) \quad (9)$$

2. Laplace 方程式 $\Delta u = 0$ は回転不変である、つまり n 次直交行列 O で変換しても Laplace 方程式を満たすことを示せ。

$$v(x) = u(Ox) \quad (x \in \mathbb{R}^n) \Rightarrow \Delta v = 0 \quad (10)$$

.....
 O を n 次直交行列とし、 $O = \{o_{ij}\}$ とする。 O は直交行列であるので、 O の転置行列と逆行列が一致する。

$$O^t O = {}^t O O = E, \quad \sum_{i=1}^n o_{ki} o_{li} = \delta_{kl} = \begin{cases} 1 & (k = l) \\ 0 & (k \neq l) \end{cases} \quad (11)$$

x はベクトルであり、その成分を $x = (x_1, \dots, x_n)$ とし、 $\bar{x} = Ox$ とする。これにより、 $v(x) = u(\bar{x})$ となる。

x_i における偏微分は合成関数の微分より次のように変形できる。

$$\frac{\partial}{\partial x_i} = \sum_{k=1}^n \frac{\partial \bar{x}_k}{\partial x_i} \frac{\partial}{\partial \bar{x}_k} = \sum_{k=1}^n o_{ki} \frac{\partial}{\partial \bar{x}_k} \quad (12)$$

2 階の偏微分は次のように求められる。

$$\frac{\partial^2}{\partial x_i^2} = \left(\sum_{k=1}^n o_{ki} \frac{\partial}{\partial \bar{x}_k} \right) \cdot \left(\sum_{l=1}^n o_{li} \frac{\partial}{\partial \bar{x}_l} \right) = \sum_{k,l=1}^n o_{ki} o_{li} \frac{\partial^2}{\partial \bar{x}_k \partial \bar{x}_l} \quad (13)$$

これらを用いて Δv を計算する。

$$\Delta v = \Delta u(\bar{x}) = \sum_{i=1}^n \frac{\partial^2}{\partial x_i^2} u(\bar{x}) = \sum_{i=1}^n \sum_{k,l=1}^n o_{ki} o_{li} \frac{\partial^2}{\partial \bar{x}_k \partial \bar{x}_l} u(\bar{x}) \quad (14)$$

$$= \sum_{k,l=1}^n \left(\sum_{i=1}^n o_{ki} o_{li} \right) \frac{\partial^2}{\partial \bar{x}_k \partial \bar{x}_l} u(\bar{x}) = \sum_{k,l=1}^n \delta_{kl} \frac{\partial^2}{\partial \bar{x}_k \partial \bar{x}_l} u(\bar{x}) \quad (15)$$

$$= \sum_{k=1}^n \frac{\partial^2}{\partial \bar{x}_k^2} u(\bar{x}) = \Delta u \quad (16)$$

よって、 $\Delta u = 0$ であれば、 $\Delta v = 0$ である。

3. 平均値定理の証明を利用し、 $n \geq 3$ の時、次の式を証明せよ。

$$u(0) = \frac{1}{n\alpha(n)r^{n-1}} \int_{\partial B(0,r)} g dS + \frac{1}{n(n-2)\alpha(n)} \int_{B(0,r)} \left(\frac{1}{|x|^{n-2}} - \frac{1}{r^{n-2}} \right) f dx \quad (17)$$

$$\begin{cases} -\Delta u = f & \text{in } B^0(0,r) \\ u = g & \text{on } \partial B^0(0,r) \end{cases} \quad (18)$$

.....

4. 関数 $u \in C^2(U) \cap C(\bar{U})$ が開集合 U の境界上を除いて調和的である時、次が成り立つことを示せ。

$$\max_{\bar{U}} u = \max_{\partial U} u \quad (19)$$

HINT : $\varepsilon > 0$ の時 $u_\varepsilon = u + \varepsilon|x|^2$ とおくと、 U の内部では最大値を取らないことを示せばよい。

.....

5. 次のような $v \in C^2(\bar{U})$ を 劣調和関数 (subharmonic) という。

$$-\Delta v \leq 0 \quad \text{in } U \quad (20)$$

(a) v が次を満たすことを示せ。

$$v(x) \leq \frac{1}{\alpha(n)r^n} \int_{B(x,r)} v dy \quad \text{for all } B(x,r) \subset U \quad (21)$$

.....

(b) 次を示せ。

$$\max_{\overline{U}} u = \max_{\partial U} u \quad (22)$$

.....

(c) $\phi : \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ はなめらかな凸関数とする。

u は調和関数、 $v = \phi(u)$ とした時、 v は劣調和関数であることを示せ。

.....

(d) u が調和的である時、 $v = |Du|^2$ は劣調和的であることを示せ。

.....

6. 開集合 $U \subset \mathbb{R}^n$ は有界であるとする。

この時、 U のみに依存した定数 C が存在し、次の式が成り立つことを示せ。

$$\max_{\overline{U}} |u| \leq C \left(\max_{\partial U} |g| + \max_{\overline{U}} |f| \right) \quad (23)$$

なお、 u は滑らかな関数で、次の解である。

$$\begin{cases} -\Delta u = f & \text{in } U \\ u = g & \text{on } \partial U \end{cases} \quad (24)$$

HINT : $\lambda = \max_{\overline{U}} |f|$ に対して、 $-\Delta \left(u + \frac{|x|^2}{2n} \lambda \right) \leq 0$

.....

2.1. $u : U \rightarrow \mathbb{R}$ の第 γ ^{ヘルダー} Hölder 半ノルムを次で定義する。

$$[u]_{C^{0,\gamma}(\overline{U})} = \sup_{\substack{x,y \in U \\ x \neq y}} \left\{ \frac{|u(x) - u(y)|}{|x - y|^\gamma} \right\} \quad (25)$$

この定義は半ノルムであることを確認せよ。

.....

半ノルムとは絶対斉次性 ($p(\lambda x) = |\lambda|p(x)$) と劣加法性 ($p(x + y) \leq p(x) + p(y)$) を満たす写像 p のことをいう。

$\forall \lambda \in \mathbb{R}$ とする。

$$[\lambda u]_{C^{0,\gamma}(\overline{U})} = \sup_{\substack{x,y \in U \\ x \neq y}} \left\{ \frac{|\lambda u(x) - \lambda u(y)|}{|x - y|^\gamma} \right\} \quad (26)$$

$$= |\lambda| \sup_{\substack{x,y \in U \\ x \neq y}} \left\{ \frac{|u(x) - u(y)|}{|x - y|^\gamma} \right\} = |\lambda| [u]_{C^{0,\gamma}(\overline{U})} \quad (27)$$

よって、絶対斉次性を満たす。

劣加法性を確認する。

$$[u + v]_{C^{0,\gamma}(\overline{U})} = \sup_{\substack{x,y \in U \\ x \neq y}} \left\{ \frac{|(u(x) + v(x)) - (u(y) + v(y))|}{|x - y|^\gamma} \right\} \quad (28)$$

$$\leq \sup_{\substack{x,y \in U \\ x \neq y}} \left\{ \frac{|u(x) - u(y)| + |v(x) - v(y)|}{|x - y|^\gamma} \right\} \quad (29)$$

$$\leq \sup_{\substack{x,y \in U \\ x \neq y}} \left\{ \frac{|u(x) - u(y)|}{|x - y|^\gamma} \right\} + \sup_{\substack{x,y \in U \\ x \neq y}} \left\{ \frac{|v(x) - v(y)|}{|x - y|^\gamma} \right\} \quad (30)$$

$$= [u]_{C^{0,\gamma}(\overline{U})} + [v]_{C^{0,\gamma}(\overline{U})} \quad (31)$$

以上により半ノルムであることが確認できる。

2.3. U 上の滑らかな関数全体を $C_c^\infty(U) \subset W^{k,p}(U)$ とし、これの閉包を $W_0^{k,p}(U)$ とする。 $W_0^{k,p}(U)$ は $|\alpha| \leq k - 1$ を満たす α において ∂U 上で $D^\alpha u = 0$ となる関数 $u \in W^{k,p}(U)$ の集まりである。

定理 17 を認めてこれを示せ。

.....

2.5. $\{r_k\}_{k=1}^\infty$ は可算で稠密な $U = B^0(0, 1)$ の部分集合とする。

$$u(x) = \sum_{k=1}^\infty \frac{1}{2^k} |x - r_k|^{-\alpha} \quad (x \in U) \tag{32}$$

$0 \leq \alpha \leq \frac{n-p}{p}$ であれば $u \in W^{1,p}(U)$ である。
 この時、 u は U の部分集合である開集合上で有界ではないことを示せ。

2.7. 弱微分の性質

$u \in W^{k,p}(U)$, $|\alpha| \leq k$ とする。
 このとき、 $V \subset U$ が開集合であるなら $u \in W^{k,p}(V)$ となることを示せ。

2.9. $W^{k,p}(U)$ が完備であることを示せばよい。そこで、 $\{u_m\}_{m=1}^\infty$ が $W^{k,p}(U)$ の $\overline{\text{Cauchy}}$ 列とする。
 この事実が成り立つことを示せ。
